49. 関東軍

①

時の流れは速いもので、平成生まれの人も大卒社会人になりました。昭和の時代はもう昔の話しになりましたが、しかし60余年にわたる激動の昭和を忘れることはできません。

外国人との会話の中で第二次大戦に関するもの、中東では日露戦争が良く話題になりました。トルコでは大半の人が東郷元帥を知っています。これは教科書にあるから当然ですが、トルコにやってくる日本人との話題に東郷元帥を挙げても自国の英雄を大半の日本人はキョトンとして知らないと答えるのには驚いていました。

同じように韓国人や中国人は第二次大戦に至る過程を良く知っています。これは小学生の頃から徹底的に教え込まれていますから当たり前ですが、韓国人船員と長い航海を共にしましたが其の知識の広さには驚きました。それに引き替え我が同胞の無関心・無知振りには愕然としますが、これもやむを得ません。学校教育で徹底的に避けているからで、歴史とはせいぜい江戸時代までで近代、現代史は完全無視です。最近‘レキジョ’（歴女）ブームだそうですが、もっぱら戦国武将のカッコヨサに憧れているだけなのでしょうか。しかしこれも一過性のブームで終わりそうです。

アメリカは建国以来僅かな歴史しかありませんから独立戦争、南北戦争から第二次大戦に至る迄の世界の動きを丁寧に教えております。

戦前の旧制高校教育の基礎理念は文学、哲学、歴史の重視でした。これは個人の思索を引出すには最適だからです。すなわち歴史とは丸暗記するものにあらず、思索するものなのです。だから最高に面白く興味尽きない分野なのです。

その昭和史の中で特筆すべきは我が国国政の中に関東軍という軍団があり独走、下克上といった負のイメージが強く、いつのまにか強大な権力と武力を蓄え‘精強無比’‘無敵七十万’と謳われ、大陸政策の尖兵として独走に次ぐ独走、中央政府のコントロールも効かないような継子となり独断先行、その結果は張作霖爆殺事件、満州事変、張鼓峰事件、ノモハン事変、そしてソ聯の侵攻、滅亡。四十年に渡って満州の野に繰り広げていった関東軍の暴走、膨張の過程において、国政の方が其の後追いの様な結果となり、国際的な非難の対象となって国際連盟のリットン調査団が調査にやってきた、調査の結果は関東軍、日本政府の犯行という報告が発表され、そのころ台頭してきたナチスと日本は世界の嫌われ者となって世界から孤立していきます。其の終局はジュネーブにおける国際連盟会議で我が国代表であった松岡外相が国際連盟脱退宣言しなければならないようような窮地に追い込まれ、結果自ら世界の孤児に追い込んでしまったのです。我が国を破滅に導いていった元凶は独走、暴走を繰り返していったこの関東軍です。ところが昭和史の中で関東軍の存在は霧の中に消えてしまいました。

今回はその関東軍を紐解いてみましょう。関東軍といっても関東地方の関東とは全く関係ありませ

ん。‘関東’というのは、中国本部（関内）と現在の中国東北地方を当時は満州（関外）と区別しておりました。其の境界線が‘万里の長城’、その終端が海に面した山海関で、その東側にあるので関の東、関東と呼ぶようになったのです。ロシアがこの半島を租借地としていた時もロシア語で（**УаН дЧн**）関東の意味の語を命名しておりました。

地図を見て下さい。北朝鮮の北西方の渤海に大きく突き出た遼東（リヤオトン）半島があります。ここが因縁の地であって、日清戦争（明治 27～28 年、1894～1895）に勝利した我が国が戦時賠償としてこの半島の割譲を受けましたが、ロシア主導の三国干渉（ロシア、フランス、ドイツ）により、やむなく清国へ返還しましたが、早速ロシアが艦隊を派遣、強引に租借地として奪い取り、半島の先端にある旅順に軍港を構築し其の付近に堅固な要塞地帯としてしまったのです。かつ満州を横断してウラジオストクとシベリヤ鉄道を結ぶ東清鉄道を建設し、義和団事件で清朝が‘扶清滅洋’を叫び、連合国と宣戦布告（映画、北京の 55 日）した時、好機とばかりにロシアは全満州を占領し、朝鮮半島まで触手を伸してきます。その暴挙に新興国家日本政府、国民は悲憤慷慨、切歯扼腕、しかし国力は未成熟、臥薪嘗胆を誓い、その後国民が執った行動は‘坂の上の雲’そのものです。

明治 37 年日露戦争開戦　多大なる犠牲を払いましたが辛うじて勝利し、日露講和条約締結直後の明治 38 年 9 月（1905）、遼東半島の一角に関東総督府が設置され、新設の第十四師団、十六師団が総督の指揮下に入りました。これを駐箚師団（計約 1 万の兵力）駐箚とは外国へ派遣するという意味で、国外初の駐留で指揮権は総督府長官にありますから駐箚師団と呼称していたのです。

この駐箚師団は 2 年交代で内地師団からの派遣でしたが、満州鉄道の敷設伸張により沿線警備の目的として独立守備隊 6 個師団が駐留するようになり、関東軍司令官が関東庁長官を兼務するようになってから関東軍の暴走が始まります。

関東軍高級参謀河本大作大佐が主謀で起こした張作霖爆殺事件（1928 年 6 月 4 日）、石原莞爾、板垣征四郎関東軍高級参謀の策謀による満州事変（1931 年 9 月 18 日）、昭和 20 年の敗戦まで続く十五年戦争はこうして始まり泥沼化していくわけです。

話は全く変わりますが、世界的名指揮者小沢征爾氏の名前「征爾」は、板垣征四郎の‘征’と石原莞爾の‘爾’、をとって征爾と命名されたのですが、征爾氏の父親である小沢開作氏は満州建国に奔走した人で満州青年連盟の理事ですから、関東軍高級参謀とは親交のあった人で非常に尊敬していたようです。特に石原莞爾氏は軍人としてばかりではなく、東条首相と対立して、中将で予備役に回され立命館大教授や農園開拓（山形県西山農場）と民間人としても人望のあった人です。人と人の繋がりは面白いものですし歴史を構築しているのも人の繋がりで、これを紐解いていくことは歴史を探究する醍醐味です。

私はたいした実績はありませんが、文化人類学の講座を持って講じておりました。自然科学や比較宗教の面からとか多角的に論じておりますが、その中で関東軍との接点が僅かにあるのです。ナチスが台頭し、人種差別政策の暴風が吹き荒れ其の矛先はユダヤ民族に向かった頃ヨーロッパに住むユダヤ人が多数逃げ出しました。大半がアメリカへ向かったのですが、其のルートは船で大西洋を渡るの

が第一、もう一つはシベリヤ鉄道で満州を経てアメリカへ向かうのですが、一度日本に入国しなければならずビザが必要です。ですからビザなしで満州に辿り着いたのですがそこを支配していたのが関東軍です。

②

そこで戦前の我が国の負の遺産ばかりでなく、この様な面で活躍していた日本人がいたという歴史の流れの中に埋没している史実を探し出して考えてみましょう。

‘杉原千畝’とういう名前をご記憶にあるでしょうか？

TV ドラマ（主演反町隆史）、ミュージカル、舞台劇等数多く演じられております。‘東洋のシンドラ’‘センポ・スギハラ’とは、在リトアニア日本領事館で活躍した外交官杉原千畝氏です。現在でもイスラエルの小学校では教科書に載っていますから、日本人としては有名人でエレサレムに記念碑も建立されております。その功績はナチスの弾圧を逃れて多数③のポーランド在中のユダヤ人が唯一領事業務を続けていた在リトアニア日本領事館に押し掛けてきました。ところが外務省は日独防共協定に縛られ、ビザ発給を禁止していたのですが、杉原副領事は省令に抗命し日本通過ビザ発給を続け、オランダ領アンチュール島への入国を目的としたのです。これは当時世界中でユダヤ人の入国が可能であったのはこの島だけだった事に由来します。其の数 2 千数百通、家族を含めて 6 千人以上と言われており、これが全て手書きです。ところがリトアニアはソ連に併合されてしまい、領事館は閉鎖、汽車で退去された杉原氏を追ってユダヤ人がホームまで駆けつけ列車が走り出すまでビザを書き続けたのです。ドラマでも感動的なシーンでしたが、これは実話なのです。

③

ビザを取得したユダヤ人はシベリヤ鉄道でウラジオストック経由で敦賀に上陸し神戸から船でアメリカへ向かっております。この神戸にしばらく滞在したのですが、神戸市民はいろいろと援助しております。アメリカも通過ビザでしたが、そのまま受け入れて亡命ユダヤの人々はアメリカ国内にとけ込んでいっようです。

④

そしてもう一人日本側で大活躍したのが大迫辰雄さん（2003 年 86 才で死去）を紹介します。大迫さんは日本交通公社（現 JTB）の前身である日本旅行協会に勤務中（当時 34 才）、ユダヤ難民救出を担当、ウラジオストックへ迎えの船をチャーターし、自分も乗り込んでソ連側との難しい交渉、病人の世話、あらゆる仕事を一手に引き受け、更にシベリ

ヤ鉄道で次々に到着する難民のため1940年から41年厳冬期間荒れ狂う日本海を二十数回往復し6000人の難民を見事運んでいます。しかも日本側も官側は厄介者扱いで大部苦労したようです。この偉大なる先人である杉原氏と大迫氏は「命のビザ」の恩人としてユダヤ難民だった人達からは感謝されています。

⑤

70年も過ぎた現在、殆どの方々は故人になられておりますが、其の家族や子孫が其の恩義を忘れず世界中にいる関係者が想い出の敦賀港へ集まろうという計画が進行しています。2010年5月18日付　新聞によると駐日イスラエル大使館も乗り気なようで、歴史は何時までも続いているのです。

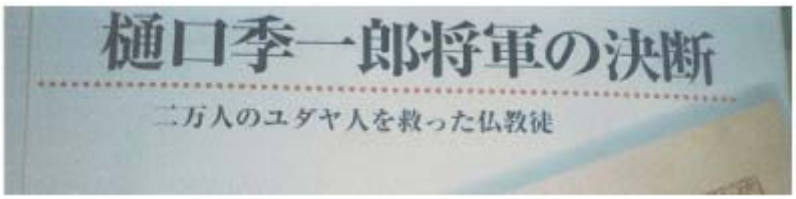
その後の杉原氏は他の在欧の領事館に赴任し、ケーニヒスベル領事館在勤中　独ソ開戦の極秘情報を入手し外務省に電報で知らせております。これは駐在武官の報告より大分前ですから外交官としても辣腕だったようです。終戦後はソ連に1年間抑留され帰国しましたが、外務省から口頭で辞表を出すことを強制され、省令の抗命の責任を取らされたようです。しかし外務省は本人の意志による辞表提出だと説明しておりましたが、鈴木宗男議員が外務政務次官だったときの1991年杉原夫人を外務省に呼んで謝罪しております。

この杉原氏は戦後イスラエル政府から多くのユダヤ人を救った日本人として最高の勲章である‘ヤド・バシエル賞’を授与され、エルサレムの丘に記念の植樹と顕著碑があり、イスラエルの小学校で教えておりますから全ての国民が知っている日本人です。

もう一つこの時期ユダヤ人を助けた話があります。杉原氏の偉業は個人的な活躍でしたが、こちらは組織としての活躍で関東軍との接点があるのです。

⑥

ナチスの凶暴さが増すに連れヨーロッパの各地から逃げ出した多数のユダヤ人がシベリヤ鉄道でアジアを目指したのですが、シベリヤ鉄道はチタの東側にあるカルムスコエという分岐点でハバロスクからウラジオストックへ向かう線と満州へ向かう線に分かれます。ウラジオストックはソ連ですから出国できない怖れがあるため、満州へ向かう列車に乗り、ブリヤード自治共和国の国境（蘇満国境）のオトポール駅で強制下車を命ぜられた（オトポール事件）。



⑦

満州国外交部は満州入国を拒否、ユダヤ難民は食糧もなくボロを纏ったまま吹雪の中に立ち往生したのです。この情報を聞付けた

関東軍ハルピン特務機関長樋口少将が自ら越境して交渉し特別列車を仕立て満州側に連れてきております。その数は 2 万人と言われていましたが、その後の研究では 1 万強くらいですが、それにしても凄い人数です。

食糧や衣類を配って保護しており、ここで活躍したのが関東軍特務機関員で樋口少将の命を受けた安江大佐、河村少佐が中心になってこの難事業に挺身、保護に活躍し、ビザのある人はアメリカへ、ビザの期限切れ、若しくはビザの無い人々の取り扱いに苦慮したのです。この時樋口少将の持論が提案され強硬に関東軍上層部に施行を迫ったのです。それは難民ユダヤ人に土地を与え自治区を創ることです。

1937 年 12 月　第一回極東ユダヤ人大会が開催され、多数のユダヤ人が出席し、来賓として招かれた樋口少将は、日独防共協定を締結したばかりの同盟国であるドイツの反ユダヤ政策を激しく批判し「ユダヤ人を追放する前に彼らに土地を与えよ」という演説を行っています。これに激怒したナチスドイツは駐日ドイツ特命全権大使を通して陸軍省に樋口少将の演説の取り消しと罷免を要求してきました。これに対し関東軍参謀長だった東条中将（後の開戦時の東条総理）がこれを拒否、樋口少将を擁護しておりますから、この時点ではアメリカとの関係改善を模索してユダヤ人脈にイチルイの望みを懸けていたのかも知れません。これは松岡洋右満鉄総裁（後の外務大臣、日ソ不可侵条約、日独伊三国同盟の全権大使）もユダヤ人擁護に賛同していますから政治は複雑です。この様な背景がありましたからハルピン特務機関を総動員してユダヤ人の入植地を満州国内に造ろうとしたのです。即ち小さなイスラエル建国です。歴史に‘モシ、If’は許されませんが、‘モシ’入植地だけでもできていればアメリカとの関係は悪化せず、ABCD ラインの経済封鎖もなく、必然的に太平洋戦争もなかったのではないでしょうか。アメリカの金融機関は大半がユダヤ系、ロビストも最大の力を持っているのはユダヤ系で、政策決定には大きな影響力を持っているのです。

⑧

この入植計画は樋口少将が独断で行動したわけではありません。1934 年（昭和 9 年）満州重工業総裁鮎川義介氏がユダヤ難民の移住計画を提唱し、1938 年五相会議で政府の方針として定められました。実務面では陸軍は安江仙弘大佐、海軍犬塚惟重大佐を任命、ヨーロッパでの迫害を逃れたユダヤ人を満州国に招き入れて、自治区を建設する計画があったのです。事実満州の地には多くの亡命ユダヤ人がおり、かつロシア革命で亡命したロマノフ王朝側の白系露人が多数居住しておりましたからまさに国際的な地域だったのです。

具体的な計画は‘河豚計画’といって犬塚海軍大佐が計画し命名しております。その意味するものは 1938 年 7 月犬塚大佐が行った演説に由来しるもので、ユダヤ人の経済力や政治力を評価し、ヨーロッパ諸国で迫害を受けるのみならず、1935 年にはニュールンベルク法が制定されドイツ国内ではユダヤ人は市民権を剥奪され公職追放されるなど深刻な状況にあり（この当時はまだ強制収容所はない）、そこで 5 万人位くらいのユダヤ人に満州国移住を勧め、その経済力を満州国建設に投資してもらい、

かつユダヤ人の持つ世界のネット網、特にアメリカとの外交的対立、先鋭化をユダヤ人の力によって緩和できればとの思惑でこの計画は動き出したのです。この時の演説の要旨は「ユダヤ人の受け入れは日本とって非常に有益だが、一歩間違えば破滅の引き金ともなる二面性をもつ」そこで美味だが猛毒を持つ河豚に擬えて、「河豚計画」と命名したのです。

残念ながら関東軍内部にもこの計画に反対する幹部がおり、政府内にも反対がくすぶっているうちに三国同盟と日ソ不可侵条約の締結、ノモハン事変と状況が急激に変化し、そしてナチスのポーランド侵攻、独ソ不可侵条約を踏みにじってのソ聯侵攻とヨーロッパは奇々怪々と日本政府は頭を抱え、内閣は次々と交代しているうちに「河豚計画」も立ち消えになり、ユダヤ難民は国外へも出られず、ビザが必要なかった上海租界に送り込まれ、ここに上海ユダヤゲットーが設置され約 2 万人位のユダヤ人が生活していたようで、管理は海軍支那方面艦隊司令部付犬塚機関として犬塚大佐を指揮官とする海軍陸戦隊の一部がが担当しておりました。この経緯は手塚治虫氏の長編アニメ「アドルフに告ぐ」に断片的ですが掲載されております。第二次大戦中のあの苦しい戦局の中でのゲットーでの生活ですから大変な苦難の連続であった思いますが、終戦まで僅かな犠牲者のみで無事生きながらえました。なにしろ 2000 年も世界を流浪しながらも生き永らえてきた民族ですから、其の精神力は強靭です。犠牲者は病死以外はゲットーがアメリカ空軍の爆撃を受け、十数人爆死したようです。

⑨

関係者のその後は

○ 樋口少将はハルピン特務機関長から第五方面軍・北部軍管区司令官として赴任、中将に昇進しております。そして日ソ不可侵条約を破棄してソ連軍が侵攻、これと激しく闘い、健闘しました。ところが終戦後これを怒ったスターリンは戦犯として樋口中将を指名、引き渡しを要求してきました。その事を知った在米ユダヤ人協会が立ち上がり、得意のロビー活動を行い、トルーマン大統領を通して極東軍司令官であったマッカサー元帥に樋口季一郎氏のソ聯への引き渡し拒否を命じており、ユダヤの人々は其の恩義に報いております。

○ 安江仙弘陸軍大佐、陸軍の中でユダヤ問題の研究を命られた唯一の将校で、極東に於けるユダヤの人々と広く交流し、其の救済、権益保護に奔走し、大連特務機関長に就任してからは樋口ハルピン特務機関長と協力してオトポール事件の際には現地で解決に努力しております。その後は入植地の斡旋、上海ユダヤゲットーへの移送、海軍の犬塚大佐と協力して懸命に働いておりましたが、其の方針に対して関東軍上層部と対立し、予備役に編入されてしましましたが、1 民間人としてもユダヤ人救済に奔走しており、ユダヤ人からは絶大の信頼と感謝を受けた人です。残念ですが終戦時にソ聯軍に逮捕されハバロスクの収容所で 1955 年病死しております。

○ 犬塚惟重海軍大佐は在上海ユダヤ人ゲットーの特務機関長を解任されてから、予備役から海軍軍

人として再現役となり艦隊勤務となって、終戦後はフィリッピンで戦犯として刑に服した後、無事復員しております。

第二次大戦後　ユダヤの人々は祖先の故国の地であるパレスチナに戻り、イスラエル国を建国しましたが、それまでそこに住んでいたアラブの人々と激しい戦闘となり、近隣諸国と何度も戦争状態となりアメリカや国連の調停でなんとか収まってきましたが､現在に至るも完全に解決した訳ではなく、局所的な紛争は連続して起きています。

このユダヤには古くから同族であるユダヤ人で世界的に傑出した人物を永久に顕著するためその名を記録する「ゴールデン・ブック（金欄簿）」という制度があります。「シルバー・ブック（銀欄簿）」はユダヤ人の為に貢献したユダヤ人以外の外国人を顕彰する為の氏名とその貢献業績を記録するものです。

樋口季一郎、安江仙弘、犬塚惟重の三氏はユダヤ人協会からイスラエル国民が三氏から受けた恩義に対して其の顕著を同族としてゴールデン・ブックに記録したいと申し出が有りましたが、その時安江氏は既に病死しており､犬塚氏は上海ユダヤ人ゲットーで若干名の犠牲者がでたことに責任を感じ、この申し出を丁重に断っております。

結局　樋口氏と安江氏が金欄簿に記載され、この式典はイスラエルの首府エレサレムで行われ樋口氏が出席しております。後日犬塚氏には表彰状と記念品が贈られました。

以上のように外国人の救済に身を粉にして奔走し活躍した人々がいたのですが、そういう事実は表に出てきません。杉原氏はイスラエル政府が表彰したり、未亡人をエレサレムへ招待しましたからニュースになったり、著書が出版されたりドラマ化されましたか知られるようになりましたが、外務省は辞職を強要した事実を頑として認めておりません。

樋口氏、安江氏、犬塚氏の三人に関するものは全く表にでてないのです。かっての関係者も大半の方々は他界してしまいましたし、正確な記録も残っておりません。三氏とも軍人でしたから軍人イコール負の遺産的な発想でしょうか、日本国内では全く知られていないのですが、イスラエルでは誰でも知っている超有名な日本人です。

我が国の歴史感覚、歴史教育に疑問を感じている次第です。

◎　河豚計画

ユダヤの歴史を最期の部分だけを述べれば、イスラエルの死海のほとりにマサダ砦の遺跡があります。紀元前 1 世紀、ユダヤのヘロデ王が造った要塞兼王宮でした。ヘロデ王の死後、ユダヤは超大国ローマの支配を受け、その圧政に苦しみ、紀元 70 年、このマサダ砦に女、子供を含む僅か 960 人が立て籠もりローマ正規軍の大軍を相手に絶望的な籠城戦を展開、3 年間抵抗をした後、最期に残った人達は集団自決してはて、籠城できなかった人々はディアスポラ（世界へ離散）という過酷な運命にあい、2000 年後の第二次大戦後にやっとイスラエルを建国したのです。その間世界に散った人達は各地で邪魔者扱いにされながらもユダヤ人としての矜持とユダヤ教を護り通してきたのです。遠く離れた我が国とは全く関係ないことと考えるかも知れませんが、これが大ありでシベリヤ出兵あたりからユ

ダヤ人の接触が始まり、ヨーロッパでのユダヤ人差別が激しくなりだしたころ逃げ出したユダヤ人が満州に住みついていたのです。それ以前にはロシア革命でロマノフ王朝に近い大勢の白系ロシア人が満州に逃れてきていたのですから、まさに国際的な人々の集まりだったのが満州で、特に帝政ロシアが築いたハルピン市は国際的な都市だったのです。

関東軍の警備範囲は関東州（遼東半島）と満鉄沿線の警備が主な目的でしたが、満州全土を支配地に置き、五族協和（日本人、漢人、朝鮮人、満州人、蒙古人）、王道楽土を謳い、理想の共和国を創ろうとしたのが満州国で、その中にユダヤ人の自治区を設けようとするのが河豚計画です。

軍当局もシベリヤ出兵時にはこの問題に遭遇し関心を持ち専門に調査研究する部署、担当官を選任しております。また官僚や経済人も関心を持ち、最初の具体的な提案は 1934 年発表した「ドイツ系ユダヤ人五万人の満州移住計画について」という論文を発表しました。

経済人である鮎川氏は日産コンツエルンの創始者であり、新に満州重工業を立ち上げ準備中のときでしたから、彼の脳裏にはユダヤ人経済力の象徴であるアメリカの銀行家ジェイコフ・シフが満州に投資をしてくれることを念願したのでしょう。なにしろ 30 年前の日露戦争の時、シフ家が所有していたクーン・ローブ商会が戦費の約 4 割を調達してくれたのですのですから、日露戦争の勝利はシフ氏のお陰と言える人なのです。

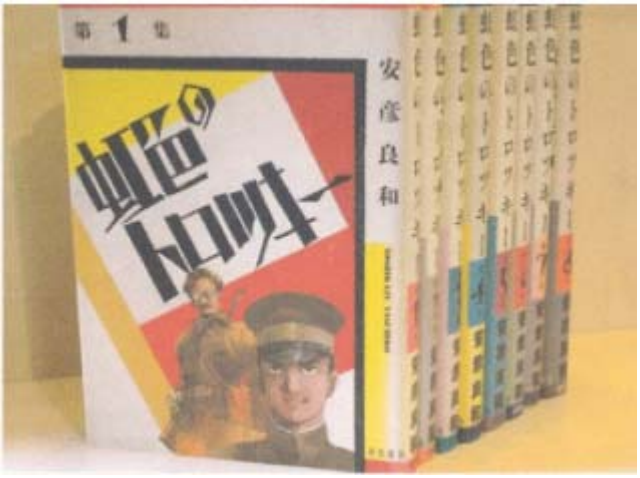
政府中枢でも、ユダヤ人の経済力・政治力・ユダヤ人が世界中に広がっている国際的情報網を利用できたらと願い、ドイツやソ連をはじめとするヨーロッパ諸国で迫害を受けているユダヤ人を救出すれば、在米ユダヤ人から確実で永続的な友好関係の構築が可能だと判断し、1937 年に関東軍による第一回極東ユダヤ人大会が開かれ、1938 年には第二回・第三回が開かれより具体的なユダヤ人自治区建設構想が論議されています。

日本政府も対ユダヤ人政策に関する指針を定め 1938 年 12 月に開催された五相会議（首相・蔵相・外相・陸相・海相）による会議で「ユダヤ専門家」からの上申された計画書を前向きに了承しております。11 月に発生した有名な「水晶の夜」事件が発生、これはナチス党の青年行動隊がユダヤ人の商店街を襲い、ショーウィンドーのガラスを滅茶苦茶に破壊し道路にチラカッタガラスの破片がキラキラ輝いたことからこの名があります。この時を境にナチス党の凶暴化が始まり、ユダヤ人の逃亡が始まるわけです。この暴挙をアメリカ在住のユダヤ人をはじめ、世界中のユダヤ人が激怒し、ドイツ在住のユダヤ人救済に全力を尽くします。

ですからこのとき我が国がユダヤ人救済、ユダヤ人自治区の設定を表明していればユダヤ人からの信頼、支持を得て、アメリカ政府との関係もあれほど悪くはならず太平洋戦争は回避できていたかも知れません。ところがドイツから強硬な横やりが入り、政府部内に慎重論がでてグラツキだし、結局は優柔不断、様子を見ましょう的な先送りしてしまい、かつ駐独大使であった大島浩陸軍中将の調子の良いナチス賞賛ばかりの情報に惑わされ、小野寺少将が報告したナチは必ず崩壊するとした情報分析は顧みることもなく無視されたばっかりに日独伊三国軍事同盟に傾斜していく愚かな過程が悔やまれてならず歴史を学ぶ、或いは思索していく時こそが、その時代に彷徨している時です。

この河豚計画が実現していたら日米戦争は無かったくらいの大計画でした。ただ満州建国に暗躍した中心が関東軍の高級将校達でしたから国際的な感覚や視野を求めても無理なのかもしれません。広い視野の国際人が中心になるべきでした。

◎ 「アドルフに告ぐ」手塚治虫の長編漫画で全5巻、講談社と小学館より出版、アドルフというファストネームの三人が主人公で日本、独逸の地でナチスが台頭する頃から物語は始まり、ユダヤ人迫害、満州へ逃れる、その難民を助ける樋口、安江、犬塚の三氏の活躍、ユダヤ民族自治州設立運動、日独伊三国同盟の締結、ナチスのソ連侵攻、上海ユダヤ人居留問題、そして敗戦と昭和の歴史を彩る数々のエピソードを織り交ぜた実に面白い長編漫画です。勿論創作ですから史実とはやや異なりますが全体の流れは的確に捉えおり、漫画と馬鹿にしないで一読をお薦めします。



◎ 「虹色のトロッキー」安彦良和原作、1990年11月から1996年11月の長期間「月刊コミック」に72回連載された大長編漫画で中公文庫ーコミック版から本として全８巻出版されています。昭和初期の満州が舞台で、蒙古と日本人の混血児の青年が両親の敵を討つ物語で、関東軍や満州政庁・満鉄等で活躍していた人達が実名で登場しますから実に面白いのです。当然　樋口・安江・犬塚の三氏も実名で登場しユダヤ人居留問題で活躍します。主題のトロッキーとは、スターリンの政敵であったレフ・トロッキー氏（1879ー1940）のことで、スターリンが書記長に就任し権力を掌握すると凄まじい‘血の粛正’を断行、最期の残ったトロッキー氏は身の危険を感じ、メキシコへ亡命、スターリンの密命をうけた刺客（ラモン・メルカデル）がメキシコへ行き暗殺しております。関東軍特務機関ではメキシコへ亡命したトロッキー氏を満州に迎入れて反スターリン運動をさせる「トロッキー計画」が存在したのは事実です。この計画の実現とノモハン事変をモチーフにしたドラマで歴史に“ＩＦ”は禁物ですが、漫画の世界では歴史のＩＦが現実の世界のように描かれますから実に爽快な面白さです。‘血の粛清’に関しもう一つ、昭和13年6月ソ連軍現役のリュシコフ陸軍大将が単独で蘇満国境を徒歩で越境、関東軍に投降・保護を求める事件がりました。スターリンの粛正を怖れての逃亡ですが、戦後逃亡罪で銃殺されました。

我が国は世界に冠たるアニメ文化の国ですが、その歴史は古く1945年4月に公開された我が国初の

長編アニメーション“桃太郎の海の神兵”からの伝統で、世界最高のアニメ文化の華が満開です。（風防の上にいるのが犬、翼にいるのが猿、操縦しているのは桃太郎さん）

写真・絵

① 関東軍総司令部の建物、内部は要塞のように堅固に建築されていたようです。

② リトアニアはバルト三国の一つ、ナチスドイツに占領され、その後ソ連に支配され苦　難の路を歩んできた小国、1938 年頃ナチスの侵略が始まり最初ポーランドが侵攻され、ポーランド国内のユダヤ人狩り始まり、その頃ヨーロッパで唯一ビザ発行を続けていた　リトアニア日本領事館にポーランド在住のユダヤ人が殺到、しかしこの行為は杉原領事の善意であって外務省はビザ発行禁止の通達を出していた。ソ連による退去命令がだされ汽車がホームを離れるまでビザを書き続けた杉原領事の英雄的行為によって二千数百冊のビザが交付され（当時は全て手書き）、家族を含めたビザなので数千人のユダヤ人は　シベリヤ鉄道で逃れてきて日本経由で米国へ渡り、‘命のビザ’として戦後有名になりましたが、杉原氏は外務省令を無視したことにより戦後辞表提出を強要されております。

③ 2005 年ＴＶドラマとして制作された「杉原千畝物語/六千人の命のビザ」監督渡辺孝好主演　反町隆史・飯島直子、現地リトアニアで長期間ロケした力作でした。

④ 退去を命じられ領事館のあったカウナスの駅頭　列車が発車するまでビザを発行し続けた杉原氏の姿、ドラマの最高の見所でした。（ＴＶの１シーンです）

⑤ シベリヤ鉄道・ウラジオストック・日本海を船で敦賀上陸・陸路神戸にやっと辿り着いたユダヤ難民の人達、神戸では米国への客船が少なく長期間滞在したので神戸市民は献身的に保護してくれたと、私が紐育で働いていたとき何度も聴かされました。

⑥ ⑦ビザ無しで満州に辿り着いたユダヤ難民の人達、蘇満国境で立ち往生していたのを関東軍特務機関長樋口季一郎少将が直接出かけソ連側と交渉して特別列車を出して全員満州国内に連れてきて保護した。この様な軍人もいたのです。

⑧ 日露戦争:貧しい我が国が大国ロシアと戦うのですから戦費はいくらあっても足りないくらいで、当時我が国の国家予算が 2 億 6 千万円、1 年間の日露戦争で 20 億円の戦費を使っています。当時日銀副総裁であった高橋是清が英米を廻って戦時外債を願ったのですが、小国日本の勝ち目は全くない馬鹿にして全く購入してくれなかったのですが、アメリカのユダヤ系金融業者クーン・ロエブ商会のヤコブ・シフ氏が大量に購入してくれ、又ユダヤ系財閥ロスチャイルド氏も引き受けてくれて戦中・戦後併せて 13 億円分を購入してくれたので、戦費総額の半分以上はユダヤ資本からのものでした。ただし、ユダヤ側にも打算があり、ロシア在住のユダヤ人はロマノフ王朝から迫害されており、これを打倒したいと画策していたのです。ですからロシア革命の指導者はユダ

ヤ系の人が多かったのですが、その後スターリンによって全員粛正されてしまいました。

⑨ 手塚治虫氏の長編漫画「アドルフに告ぐ」は河豚計画の一部が描かれている貴重な本で、ある程度の知識を持って読むと非常に面白いものがあります。